



Data

監督・脚本：片渕須直
 原作：こうの史代『この世界の片隅に』（双葉社刊）
 声の出演：のん／細谷佳正／尾身美詞／稲葉菜月／牛山茂／新谷真弓／岩井七世／花澤香菜／小野大輔／潘めぐみ／小山剛志／津田真澄／京田尚子／佐々木望／塩田朋子／瀬田ひろ美／たちばなことね／世弥きくよ

👁️👁️ みどころ

新たに250カット以上、約40分が追加された本作は、続編？ディレクターズ・カット版？いやいや、片渕監督の言葉では、“新たに誕生した”ものだそうだが、それはなぜ？

前作が公開後2年以上のロングランヒットを記録したのはなぜ？『男たちの大和』（05年）や、『永遠の0』（13年）には「戦争賛美」という批判がつきまとったが、前作にはそれが全くないから、映画評論家は大政翼賛会的にこぞって本作を支持？

すずさんの物語にリンさんが加わると、三角関係はどうなるの？反戦色はどうなるの？そんな点まで踏み込んでいくと、本作はかなり難解。したがって、アニメだから子連れで気楽に、はダメ！じっくり集中して鑑賞し、アレコレとしっかり考えたい。



■□■タイトルに注目！これは続編？それとも新作？■□■

クラウドファンディング方式で資金を集め、片渕須直監督が作った『この世界の片隅に』（16年）は、2016年11月12日の初公開から静かなブームを巻き起こし、公開後2年以上1日も途切れることなく上映が続くという映画史上稀に見るロングランヒットを記録したようだ。若干あまのじゃく気味性分の私は、そんなブームに乗るのはイヤだったが、たまたま時間が空いた時に同作を鑑賞。そして、「アニメがあまり好きでない私も、すずの日常生活を丁寧に描いた映像の美しさと優しさに納得！」「広島弁丸出しの、のんのセリフは心地良く、時々見せる『非日常』の描写もなるほど、なるほど・・・。」「タイトルの意味を噛みしめながら、ヒロインのそんな心の叫びをしっかりと受け止めたたい。」と書いた（『シネマ39』41頁）。ところが、今般突然『この世界の（さらにいくつもの）片隅に』と題す

る本作が公開されると聞いて、ビックリ！こりゃ一体ナニ？

映画界では、ある作品がヒットすると、柳の下の二匹目のどじょうを狙って続編を作ったり、シリーズ化したりするのが常だが、同作はあれで「完結」していたから、その続編はないはず。そう思っていると、小さな字で「さらにいくつもの」と付け加えられている部分に本作の意味があることを発見！私は潜水艦モノの代表に挙げている『Uポート 最後の決断』（03年）が大好き。同作は98分というコンパクトな時間内に、血湧き肉躍る活劇と興味深い人間ドラマが収められていた（『シネマ7』60頁）。ところが、2005年2月にそれを観た2年半後の2007年9月に、『Uポート（ディレクターズ・カット版）』（97年）が公開されたからビックリ。しかも、それは3時間29分の長尺だったから、艦長の他にも興味ある人物像がたくさん描かれていたし、クライマックスとなるジブラルタル海峡突破の攻防戦は手に汗握る展開になっていた（『シネマ16』304頁）。すると、本作もそれと同じような、片渕監督による新たなディレクターズ・カット版？

いやいや、パンフレットのイントロダクションや片渕須直監督インタビューによれば、そうではないらしい。つまり、本作は続編でもなければ、ディレクターズ・カット版でもなく、完全新作らしい。それについて、イントロダクションには「決して“生まれ変わった”のではない。さらにまた新しいチャレンジを重ね、“新たに誕生した”のだ。」と書かれているが、その意味は？

■□■アニメだから子連れで気楽に？それはダメ！■□■

私が毎号読んでいるキネマ旬報の1月上・下旬合併号によれば、2019年のハリウッド映画については、「冷え込んでいた興行が『アナと雪の女王2』の公開で、ホットな状況へ一転」したらしい。私は、『この世界の片隅で』と同じようにヒットした『アナと雪の女王』（13年）を鑑賞したが（『シネマ33』未掲載）、その続編たる『アナと雪の女王2』（19年）はパス。つまり、いくら大ヒットしてももう観る気はしないわけだ。なぜならそれは、やはり子供向けのアニメだ（にすぎない）からだ。しかし、本作に続いて来年に公開される台湾発のアニメ『幸福路のチー（幸福路上）』（17年）や2001年の9・11同時多発テロ後のタリバン政策下のアフガニстанを舞台に11歳の少女を主人公にしたアニメ『ブレットウィナー』（17年）は決して子供連れで気楽に観るアニメではなく、多くの政治的メッセージや社会問題提起を含むアニメだから、大人がじっくり考え勉強しながら観るべきアニメだ。しかし、新たに250カット以上、約40分が追加された本作は、前作以上にその色が強まっている。

前作は、こうの史代が07～09年に「漫画アクション」誌に連載した同名コミックに惚れ込んだ片渕監督が、詳細に調査を尽くし、当時広島に住んでいた人からも話を聞いて作ったもの。すると、当然同作では、主役の北條すず役を演じるのんの広島弁を聞き取れることが大前提になるうえ、あの時代の言葉やあの戦争中特有の言葉も理解する必要がある。本作のパンフレットには、「劇中用語解説」として青葉【あおば】、海兵団【かいへい

だん】、工場【こうしょう】、女子挺身隊【じょしていしんたい】、尋常【じんじょう】、千人針【せんになはり】、代用炭団【だいようたどん】、鎮守府【ちんじゅふ】、伝単【でんたん】、楠ご飯【なんこうめし】、入湯上陸【にゅうとうじょうりく】、配給【はいきゅう】、ミルクキャラメル、迷彩塗粧【めいさいとしょう】、モガ、隣保班【りんぼはん】、録事【ろくじ】等の言葉が解説されているが、それらの勉強が不可欠だ。また、その隣にある「すずさんの生きた時代」の勉強も同様だ。私たち世代ならこれらの時代や歴史もわかるし、これらの言葉も理解できるが、クラウドファンディングで出資した若者たちはきっと理解できないはずだ。このように本作は、アニメだから子連れで気楽にという映画ではないから、しっかりパンフレットを読み、勉強したい。

■□■大ヒットの要因は、この史代が描く画の魅力！■□■

漫画やアニメの魅力はアニソンの魅力を含めているいろいろだが、その1つが画の魅力。古くは『鉄人28号』や『サザエさん』『宇宙戦艦ヤマト』、そして宮崎駿監督の『風の谷のナウシカ』(84年)や『千と千尋の神隠し』(01年)、近時は新海誠監督の『君の名は。』(16年)や『天気の子』(19年)を代表として、「あのアニメ」と聞けばすぐにそれぞれ特有の画が浮かんでくるはずだ。新聞の連載小説では、文章と共にその画が大切。司馬遼太郎の『坂の上の雲』が産経新聞に連載されていた当時の挿画も、渡辺淳一の『失楽園』が連載されていた時の挿画もすばらしいものだった。ちなみに、私の中国人人脈が広がる最大のきっかけとなったのは、現在は神戸国際大学の毛丹青教授と知り合ったことだが、最近彼が発揮しているのが、画の才能。ほんの趣味のつもりで画きはじめた挿画が瞬間に評判を呼び、今やそれだけをターゲットにした取材や出版が始まっているからすごい。そう考えると、本作の原作者であるこの史代がすごいのはストーリーテラーとしての能力だけでなく、画の能力、魅力だ。

アニメ映画たる本作のキャラクターデザイン兼作画監督は松原秀典だから、本作の画にこの史代氏がどのように関与しているのかは知らないが、少なくともこの史代が画いたものではないことはハッキリしている。ただ、私は原作を読んでいない(見ていない)ので、そこでの画がどんなものかは知らない。本作のパンフレットには、本作の公開と共に作られ配布された「広島ロケ地MAP」「昭和8年広島中島ロケ地MAP」「呉市ロケ地MAP」が掲載されているが、これも、前作公開時に片瀨監督が広島・呉の舞台挨拶に訪れた際に依頼を受け、浦谷千恵が画いたものだから、この史代とは無関係だ。

他方、パンフレットには「すずさんからの手紙」としてクラウドファンディングの支援者に届けられた4通の絵葉書が掲載されているが、これはすべてこの史代が描きおろしたものだ。そしてまた、本作のアニメ画の制作が直接この史代の手によるものでないことは明らかだが、この史代の原作画に忠実に沿って作成されたものであることも明らかだ。そう考えると、本作が大ヒットした一因はのんの広島弁だが、最大の要因はこの史代の画だと言えるだろう。

■□■約40分のカットで何を追加？その読み解き方は？■□■

映画検定3級を受験する際に私が教科書にしたのは、キネマ旬報映画総合研究所編の『映画検定 公式テキストブック』(06年)。その第4章は「映画の用語集」で、そこでは「ショット」「カット」「シークエンス」「テイク」の解説がある。カットは本来監督が「カット」と言うと、そのショットの撮影が終了したことを意味するものだが、日本ではカットをショットの意味で使うことが多い。そして、ショットとは映像の単位で、時間的に連続して撮影されたフィルムの頭のコマから末尾のコマまでを1ショットと数える。また、一つの場所あるいは特定の人物の行動を連続して描写したショットの集合体をシーン(Scene)といい、場所、時間、表現スタイルが変わることで一つのシーンが終わり、別のシーンになる。シークエンス(Sequence)とはシーンが集まって一つの場面やエピソードになったものだ。他方、テイクは監督が「カット」を宣言するまでにカメラが撮影した部分を呼ぶから、OK、終了と判断されないなどの場合は何度もテイクが重ねられることになる。

本作には前作で映像化されなかった原作のシーンが、250カット以上、30分以上にわたって追加されているため、パンフレットには「追加シーン解説」があり、新規に作画された13のシーンをピックアップし、それらが本編中のどこに挿入されているかを①～⑬で記している。本作は注目作だけに新聞紙評も多く、そこではこの史代の原作にあった呉の遊郭の女、白木リンを巡るエピソードの追加が書かれている。前作でも白木リンは登場していたが、本作でははずとリンとの“絡み”のシーンがたくさん追加されたことによって、ずず、夫の周作、リンの三角関係(?)というテーマが加わることになるわけだ。その点について、新聞紙評では「主人公ずずの悩みはより深まる。」「自分と結婚する前の夫・周作とリンのつながりを知ったずずは、夫への愛と、リンとの友情のはざままで立ちすくむ。」等と解説されているから、それが本作の大きな見どころになっていることは間違いない。しかし、ハッキリ言ってこの3人間の微妙な(三角)関係と、それを巡るずずの気持ちの揺れや感情の爆発を読み解くのは難しい。なぜなら、当然ながら本作のストーリー展開ではそれをズバリと表現せず、微妙な示唆や暗示で表現しているからだ。

本作のパンフレットには4頁にわたる片渕監督のインタビューがあるうえ、キネマ旬報の1月上・下旬合併号でも115頁から122頁までにわたってのんと片渕監督の対談を掲載しているから、それらを熟読したい。それによってはじめて、「なるほど、あのシーンはそういう意味だったのか」と気付くことも多いはずだ。

■□■本作は反戦映画？大和ミュージアムへの賛否は？■□■

本作の主要な舞台になっているのは、ずずが生まれた軍港の呉。その呉には大和ミュージアムがあり、私は2005年1月23日に、6億円をかけて尾道にできた実物大の戦艦大和のロケセットと共にそれを見学した。その動機は『男たちの大和/YAMATO』(05年)を観たことだ(『シネマ9』24頁)。同作を巡っては、『永遠の0』(13年)(『シネマ

31』132頁)の時と同じように、「戦艦大和への賛美、戦争の賛美だからけしからん」という意見も出ていたが、私はそれに大反対。そこで、当時連載していた産経新聞「That's なにわのエンタメ」(05年12月9日)では、『男たちの大和』観て熱く語れ』のタイトルで同作の魅力を書いた(『シネマ9』64頁)。

本作の劇場公開に合わせては、呉の観光ガイドやグルメマップ等の他、大和ミュージアムのチラシが劇場に置かれている。また、そこで2019年4月24日から2020年1月26日まで開催されている「第27回企画展 海底に眠る軍艦—『大和』と『武蔵』—」のチラシも置かれている。すると、本作の公開については、またぞろ「戦争賛美でけしからん」という意見が出てくるの？

■□■今や映画批評も大政翼賛会的に？異説は？■□■

『男たちの大和』(05年)や、『永遠の0』(13年)にはケチをつけやすいが、前作のような「この世界の片隅を誠実に精いっぱい生きた」すずさんを主人公にした「良心的な映画」にはケチがつけにくい。そんな前作に新たなバージョンを追加した本作に対しても、戦争を巡る論点については、同じようにケチをつけにくい。しかし、本作で追加されたのは夫・周作の三角関係や不倫に通じるものだから、その点からのイチャモン付けは可能だ。本作の新聞紙評は多いが、そのためその点についての賛否両論に分かれている。しかし、この史代の原作や、片渕須直監督が本作を演出するについて、底流に流れている「戦争反対！」のメッセージについて文句をつけている新聞紙評は皆無だ。そして、キネマ旬報1月上・下旬合併号における「REVIEW 日本映画&外国映画」で星5つをつけている須永氏は、「前作に対する世間の絶賛に完全には乗り切れなかったが、本作には文句なしに打ちのめされた。」と絶賛し、吉田氏も「すべてへの弱者へのエール」としている。さらに、星3つにした山田氏も、「それにしても、やはりのんはいり」と書いている。

そんな風に、すべての映画評論家が大政翼賛会的に本作を絶賛している中で、私が注目したのは、秋山登氏の「挿話が薄めた『反戦』色」と題された12月20日付朝日新聞の「プレミアシート」。そこでは「たしかに、映画に幅が出ている。すずの人物像も複雑になっている。それに、全体の諧調を失っていない。しかし、新作は新たな感銘を与えているか、私には疑問がある。」とはっきり書かれている。そしてまた、「挿話に長くこだわったせいで底に潜めた反戦のテーマを薄手なものにしていないか。追加したエピソードは、清新な意匠たりえているだろうか。それに、前作はロングランを終えたばかりというが、とすれば、新作の公開をなぜ急ぐのか解せない。」と辛口意見を明確に述べている。朝日新聞が「加えた葛藤40分 すずの新たな物語」、日本経済新聞が「考証重ね よりリアルに」と表面ヅラのことしか書いていないのに比べれば、この評論の突っ込み方はすごい。もちろん、その賛否は分かれるだろうが、映画批評はこうでなくちゃ！

2020(令和2)年1月7日記